

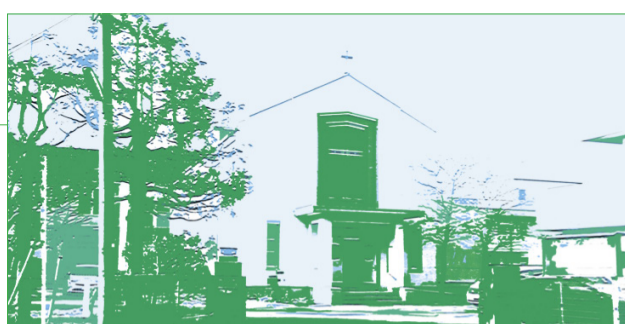


瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1

ミサの時間：月曜日-土曜日 6:20am（「朝の祈り」に続いて）
日曜日 7:00am、8:30am、9:30am



新しい信仰の共同体をつくりあげましょう

小西 広志 神父

今の時代

新型コロナウイルス感染症の蔓延によって、社会は変わりつつあります。一年前には想像もつかなかった社会の姿が目の前にあります。マスクとフェイスシールドを誰が想像したでしょうか。リモートでの仕事、リモートでの授業を誰が想像したでしょうか。飲食店を中心に個人事業主の方々を商売をあきらめ、閉店となったお店があちらこちらに見えるのを誰が想像したでしょうか。社会は急激に変わってしまい、それについていくのがやっとです。それでも、わたしたちは生きていかなければなりませんから、我慢して、歯を食いしばって生きているのが正直なところ。数年前に撮影した画像を見ながら「あの頃は幸せだったな」と懐かしい気持ちにさせられる一方で、「さあ、今日も三密を避けて、手洗いうがいに励み、マスクをして出かけよう」と気持ちを奮い立たせて生きている毎日です。

この状態がいつまで続くのでしょうか？ テレビのコメンテーターは訳知り顔で話していますが、信頼できません。ましてや為政者たちの発言には力はありません。不信と分断がじわりじわりと社会の中に侵入してきているようです。こういう時は危険です。誰か声の大きい人が分かりやすく発言した内容に、わたしたちは簡単に騙されてしまいがちだからです。

主任司祭の祈り

さて、六月の末から、瀬田教会も「公開ミサ」を再開しました。万全な対策とは言い難いですが、お互いに気をつけながら主日のミサを執り行っています。多くの方々が、感染の危険を背負いながらも、それでも教会へと集い、一緒に父である神さまを賛美し、イエスさまの御体であるご聖体をいただいて感謝し、聖霊の恵みのうちにミサを終えて帰っていかれるのはすばらしいと思います。以前にも増して、信徒の皆さんの祈りへの真剣な姿勢を感じながら、わたしはミサを皆さんとご一緒にささげています。

わたしは主任司祭として、主日のミサに際して父なる神にいつも祈るのは「瀬田教会に集う信徒の皆さんの中から感染者が出ませんように」、「ご家族の皆さんから感染者が出ませんように」ということです。自分勝手な祈りと批判されかねないのは承知しています。しかし、小教区を預かる者として、瀬田教会が感染源とならないように皆さんの安全を願うのは当然のことと思います。もう一つ祈ることがあります。それは新しい教会のあり方を教えてくださいという主イエス・キリストへの祈りです。現在の社会の状況とミサの姿はしばらくの間続くと思っています。どれくらい続くのは分かりませんが、もしかしたらかつてのような教会の姿には戻れないと考えています。そうです。教会は、今、新しく創造されたのです。今までとは少し違う教会のあり方を考えていかなければならないのです。新しい教会への取り組みは、まったく新たな出発でもあります。「イエスさま、あなたの教会を導いてください。今、この時代に求められている教会となれますように」と祈りながら。

反省

新型コロナウイルス感染症が蔓延する前の教会はどんなだったでしょう？ 少々、疲れてしまい、マンネリ化してしまった教会だったかもしれません。それにはいくつかの理由があったでしょう。東日本大震災の頃は、まだ教会に余力がありました。瀬田教会からも多くの方々が被災地支援のために関わっていただきました。あれから十年近く経て、教会のメンバーも年齢を重ねました。新しい顔ぶれも加わりました。でも、あの時のような活気は見られません。それは信徒の皆さんが悪いわけではありません。社会が3・11の後から大きく変わってしまったからです。ますますモノとお金にこだわる、そして弱い人が切り捨てられていく社会になってしまったからです。わたしたちの国が諸外国に示す存在感は、どんどん弱くなってしまいました。

司祭であるわたしがこんなことを語ったらいけないでしょうけど、わたし自身も何かマンネリ化の中で主日のミサをささげていた感がないわけではないです。何か緊張感のないミサでした。つまり、教会ではミサはずっと続けられるだろうという理由もない安堵感のようなものです。今年の三月から三ヶ月間にわたって「公開ミサ」は中止になりました。それでも大したことはないわたしは事態をみくびっていました。しかし、ミサがない、教会のメンバーと集えない、ご聖体をいただけない、という現実はとても厳しいものでした。ミサがあって当たり前、教会に集えて当たり前、ご聖体をいただけるのは当然なことと思うこれまでの理解とはまったく違う緊迫感のようなものがわたしの中に生まれました。毎回、ミサをささげるたびに、これが最後かもしれないという気持ちへとさせられました。

この世にあって、この世に属さない共同体

少し難しい言い回しですが、教会は終末的な共同体です。この世が終わりに近く続くと感じている人々の中であって、教会だけは世の終わりを待たずにいます。世の終わりとは怖いものではありません。すべての生きとし生けるものが神のいのちの中に包まれる時です。教会は、この世にありながら、この世の人の集まりとはひと味もふた味も違う共同体です。なぜなら、父なる神の方へと主イエス・キリストに導かれて、聖霊の恵みの中で歩んでいくからです。そして、教会は神のいのちの中に包まれるという終末的な出来事をすでにこの世で先取りしています。ミサとはそういうものです。いつか、わたしたちが天国で神さまを讃えて永遠に生きるこの前ぶれをミサの中でおこなっているのです。

長野県の岡谷という町に聖公会の古い教会があります。百年以上の歴史のある教会です。かつて、この町にはたくさんの製糸工場がありました。昼夜問わず苛酷な環境で働かざるを得ない女工さんたちは、日曜日の朝にこの教会にこぞって集ったといひます。そして「まるで、この世の天国のようだった」と教会での礼拝について感想を述べたそうです。

教会は「天国の先取り」なのです。教会がこの世に属さず、終末的な共同体というのはそんな意味です。

新しい教会のあり方の可能性

今、瀬田教会では主日のミサを三回おこなっています。しばらくこの状態は続くでしょう。少し、主任司祭の主導でミサの仕方を変えていました。まず、朗読の奉仕者は毎回、どなたかをお願いすることにしました。担当者を決めてしまうと「お当番」となってしまいかねないからです。そこからマンネリ化が生まれかねないからです。少し緊張感を感じてほしいのです。おかげさまで今まで朗読したことのない方々が積極的に関わりかけてくださっています。特に子どもたちや青年たちの朗読については、修道院の神父さん方の間で評判がよいです。次に、共同祈願を工夫しました。今までは例文をどなたか（お当番）が読んで、全体で応唱していました。それをやめて、皆で例文を読むことにしました。何が祈られているのかを明確にするためです。祈りのことばをここに刻んでもらいたいからです。

小さな変更点かもしれませんが、これまでのようなミサのあり方とはちょっと変わった気がしています。手芸クラブのマスクの販売や献金の代わりにジュースの販売に多くの方々が協力してくださっているのもありがたいです。これもまた新しい教会の姿です。

皆さんとご一緒に瀬田教会の新しいあり方にチャレンジしてみましょう。瀬田教会は小さな集まりだけでも、コロナの中でも皆で集まって喜び、笑顔があると周囲の方々に理解されたとしたら、わたしたちの共同体は本当に終末的な共同体へと変わっていることになるのだと思います。

最後に、皆さんに是非とも気がついていただきたいことがあります。教会に集いたくとも集えない兄弟姉妹がいるという事実です。高齢のため、基礎疾患を抱えているため、お仕事の都合で、ご家族を養育するため、などの理由で教会へと通えません。この方々はどれほどミサを切望していることでしょうか。なににもましてご聖体のイエスさまをいただくことを願っていることでしょうか。コロナウイルス感染症の蔓延は地上に分断と格差をもたらすという恐ろしい力を秘めています。教会によってこれられない方々も含めての瀬田教会です。新しい教会のあり方を模索するときには、小教区のメンバーすべてをここに留めなければならないでしょう。

皆様のご理解とご協力をお願いいたします。